

ひろしまサンドボックス中間報告会

HIROSHIMA SAND BOX mid-term reporting

2019年11月1日、fabbit広島駅前 (広島県広島市南区京橋町1-7 アス ティ広島京橋ビルディング1F) において、ひろしまサンドボックス実証 プロジェクトの中間報告会が開催された。この会には、実証プロジェクトを推進する9つのコンソーシアムが集まり、プロジェクトの進捗と今年度の成果及び、来年度の展望を発表した。



ひろしまサンドボックスは採択されたプロジェクトについては昨年度からスタートし、2020年度末までの3年間という期間で実証実験を行うことになっている。プロジェクトの折り返しを過ぎた状態での発表となり、どのコンソーシアムからも具体的なデータ収集状況やハード面の開発状況といった取組の進行状況が共有された。そして、コメンテーターが客観的な視点で質問や助言を各コンソーシアムごとに行うことにより、課題が一層明確になり、来年度に向けより成果にこだわる意識が参加者全員に醸成された時間となった。

くモデレーター/コメンテーター紹介>



<モデレーター>
 野元伸一郎

みらい株式会社

統括ディレクター

COO



<コメンテーター> **小林弘人**株式会社
インフォバーン
代表取締役 CVO



<コメンテーター> **小林弘人**株式会社
ドーガン・ベータ
代表取締役パートナー



<コメンテーター>金田典子広島県商工労働局イノベーション推進チーム 担当課長

<コンソーシアム発表①>



最新技術と人の繋がり で、江田島の美味しい 牡蠣の安定した生産を 目指す。

意外にも、牡蠣の産地の広島で あっても、採苗率が悪いと牡蠣の 苗を県外から買うため、大きなコ ストがかかり養殖事業者の経営を 圧迫している(単年で約25億円の 投資を行なったことも)。他にも 課題はあるが、そういった課題を センシング、データ分析、情報配 信、コスト削減・作業効率化を目 指すのがこのコンソーシアムの目 的だ。今年は主に水温などのセン シング、ドローンによる海上画像 の取得分析などを1年間検証し、 一定の成果をあげている。

自作のセンサーからの情報をア プリでリアルタイムに確認できる ような状態を作ったり、ドローン による産卵状況を撮影し、AIによ り解析することで、産卵状況を把 握したりと、とても実践的な検証 を行なっている。他にも通信コス ト削減のためにプライベートLTE ネットワークなども立ち上げ、漁 協の方々に寄り添ったスタンスで プロジェクトを進めている。

来年は集めたデータをもとに実 際に養殖を行なっていくことを予 定しているようで、今後の動きに 注目が集まる。

スマートかき養殖IoTプラットフォーム事業

不安定な生産高

生産者高齢化 「勘」に頼る手法 労働力不足



かき養殖における課題解決のための 産学官民によるプロジェクト

<<<今年度の実施事項>>



収集データ可視化 「ウミミル」





<<<現在の課題>>>

- ●センサー精度ばらつき
- ●センサーメンテナンス
- ●採苗前のドローン飛行タイミング
- ●無線性能改善 (アンテナ改善)
- ●幼生認識精度向上
- ●可視化アプリUI向上

<<今後の計画)

- ○かき幼生浮遊予測
- ○センサー精度安定化
- ○メンテナンスシステム化
- ○センサー設置増強(江田島湾外) ○飛行システムの具体化
- ○sXGP/LoRa無線性能向上取り組み
- ○取得画像の幼生認識実験
- ○配信プラットフォーム構築
- ○プリサービス実証
- ○課題改善

【コメンテーターからの質問など】

- ・センシングの次のステップは何を想定していますか?
- 一限定したエリアでの検証は終えた段階。今後は範囲を広 げて検証していきたい。
- ・ドローンは気象条件に左右されませんか?
- 一産卵が梅雨のシーズンということもあるので、ドローン 進化も必要だと考えている。今後は水中ドローンなどの利用 も検討したい。
- ・最終目標はどこに設定されていますか?
 - 一産卵の予測などの分野までに広げたいと考えている。
- ・現場の労働力を効率化できそうでしょうか?
- 一漁業の現場の方からの相談が増えてきており、実際に解 決につながるものもできた。
- ・「勘」や「経験」と客観データに差はありましたか?
- 一現場で利用されないと思っていたが、予想以上にアプリ をご覧いただいている。今後は皆さんと一緒に検証していけ るける状況になっている。
- ・横展開の可能性やハードルはありそうですか?
- 一まだ成果はでていないが、呉高専さんや廿日市市の事業 者さんと相談・連携が始まっている。
- ・牡蠣筏の移動の自動化も検討されていますか?
 - 一今後考えていきたいが、まだその段階に至っていない。

<コンソーシアム発表②>



最終年度は「農家さん の欲しいもの」をつくっ ていきたい。

IoT・AI分野では、収集した情報の相関関係を検証し、防除や施肥のスケジューリングの見える化などをPoC案として検討。ロボティクス分野では、急傾斜部におけるドローンの活用を進めるため、開発の後押しになるようなボータ支援を計画している。その他にもアメリカへの視察を通じて、先進的なノウハウをプロジェクトにインストールしている。

今後は実証実験を通じて確立したICTソリューションモデルとロボティクス分野の実験結果を海外の精密機器市場に売り出していくことも視野に入れている。

島しょ部傾斜地農業に向けたAI/IoT実証事業





<<<今年度の実施事項>>>















<<<今後の計画>>>

データ収集およびデータ分析による「農×ICTソリューションのプロトタイプモデルの実証」および「地域課題(人手不足解消など)の解決」に向けた施策の実証が、2020年度の主な取り組み目標。

- ・ AI分析結果を活用した 「農作業ノウハウ継承AIモデルの実証」
- ・ ワークシェア・農具シェアなどのシェアリングエコノミーの必要性検証および実証
- ・ ドローン・衛星画像の更なる活用についての検証および実証 ほか

【コメンテーターからの質問など】

・将来的には官能検査結果もノウハウ化する予定ですか?

一今年はリアルな検査の結果がでるので、これから年数を 重ねてどう変化するのかを検証していきたい。

・このプロジェクトの最終的な課題は何ですか?

ーノウハウのある農家さんがどう次世代にそれを伝えて良いか分からないという現状と、全くの素人がレモン農家になるためのハードルを下げる、という2つの課題を解決していくこと。さらに大事なのは、農園にどうやって人を集めて活性化していくか?ということがキモだと考えている。

・ドローンは先発企業とタイアップしてはどうでしょうか? ーあえてプロジェクトでやってみることで課題が見えたことは大きな成果だった。今後は検討したいと考えている。

・分析を担当しているメンバーはどこでしょうか?

ー今年度はAIのサイエンティストを抱えている企業にアウトソージングしたが、次年度は経験を生かしながら、ひろしまQuestに参加してオリジナルで実際につくっていく予定。

・エンドユーザーの想定はありますか?

ーすでに、経験者・未経験者含の方々がレモン農家さんに 参画していただいている。今後はその枠を広げたい。

・今後のビジネスの主体は誰を想定されているますか?

ー参加しているクロステックチャレンジでも考えているが、生産トレーサビリティも含め誰が主体になるのが良いかはこれから検討していきたい。

<コンソーシアム発表③>



人の流れを変え、観光 と住民のストレスフ リー化を目指す。

宮島の観光シーズンの移動に関する混雑解消や閑散期の賑わい創出が本プロジェクトの目的だ。ストレスフリーな観光は観光客のおもしてなし向上につながり、地域全体の盛り上げに貢献することを目指す。

今年度は島内の主要箇所に設置したカメラから得られる情報や公衆トイレの混雑状況をセンシングし、LINEを利用して情報発信を行なった。宮島島外の道路や駐車場にもカメラを設置することで渋滞状況や駐車場の満空情報をリアクセスの見える化も実現した。マクセスの見える化も実現した。イベントを行るというなど、検証と情報発信を行なったようだ。

今後は収集したデータに天候やイベント情報などを合わせて配信を可能にすることで、観光客だけではなく、島内の住民の方にもメリットになるようなソリューションを提供できる仕組みづくりが狙いだ。



宮島エリアにおけるストレスフリー観光の取組み



- ●AI・IoTを活用して人や車等の動向を把握して分析し、 混雑状況の発信による回避誘引や潜在的なニーズ掘起しへ ⇒ストレスフリーな観光、観光客のおもてない向上に寄与
- ●宮島取り組みを先進モデルとして県内外の観光地への展開による観光促進、盛り上げをめざす

<<**<今年度の実施事項>>>**





LINEを介した情報発信



サイネージでの情報発信



<<<**今後の計画**>>>

- ●混雑回避に向けた店舗の順番待ち等へのチャレンジ
- ●仕組み活用によるおもてなし向上、県域への展開検討 ●データ活用の有用性や自走化に向けた価値の検討
- ●ひろしまサンドボックスのコンソーシアムの皆様や 地元の方や企業の方との連携拡大
 - ●インバウンド観光客向けの情報発信

【コメンテーターからの質問など】

・島内へのカメラ設置場所の制限はありましたか?

ー景観上の問題から検証したいところに付けられないこと もあったのは事実。

(アドバイス:カメラ撮影はセンシティブなので、撮影データによる予測情報の内容配信は注意が必要であり、表情による判断も行動心理学など多角的な視点で検証することをお勧めする。)

- ・アプリのダウンロード数などの目標はありますか?
 - ーLINEの登録数は18,000が目標だが、現在5,000超。 島内でスマホをみながら観光している人は多くない。
- ・タッチポイントが旅行の前であることに留意が必要です。
- 一宮島の花火大会で行なったサンプリングの結果はフェリーの待ち時間確認など、実用性から400以上登録が増えた。地道な活動も大事にしながら、住民にも必要とされる在り方、情報発信・プロモーションも考えていきたい。
- ・集まったデータを第3者が活用し、ストレスフリー観光に つながるための環境構築に向けた構想はありますか?

ープラットフォーム化の必要性は理解している。例えば宮島へのアクセス方法は現在航路に限定されているため、配送事業者にとって有効な情報になると考えているが、どう連携するかは、今後の検討事項。

・9つのコンソーシアム内で協働したい先はありますか? ーせとうちマリンプロムナードさんとは是非連携したい。

<コンソーシアム発表④>



「みらい健幸アプリ」 で自治体保健指導の質 と個人のOOLの向上!

本プロジェクトの目的は、自治 体に蓄積された健康に関するビッ グデータをAIで分析することで、 地域の保健指導施策の最適化と同 時に、個人の健康課題に対して適 切な保健指導を立案助言するAIシ ステムの構築だ。このようなこと が実現すれば、医療費・社会保障 費の削減が見込めるとともに、被 保険者のQOLの向上も見込める。

自治体側のレセプト情報などを 情報流通基盤に乗せ、利用者個人 の購買履歴や交通履歴などの情報 と合わせて研究機関がAI分析する ことで重症化する個人を予測して いくシステム構築を目指してい る。

今年度は当初予定していた自治 体からの事前のレセプトの開示が 個人情報であることから難しく、 アプリを使う個人からの申し込み を起点として情報連携が始まると いう仕組みでシステムを構築し、 来年度スタートさせる予定だ。

今後、アプリは全県民に配布 し、複数の自治体での実証実験を 経て横展開していく。

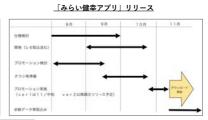
広島県民の医療や健康等個人情報にブロックチェーン型 情報管理と情報信託機能を付与した情報流通基盤の構築

医療費・社会保障費の増大に対 して、医療保険者が積極的に医 療費の適正化や被保険者のQOL 向上への施策を講じる必要性



(<<今年度の実施事項>>)

レセ・健診情報を活用した重症化予測と 信託情報の活用 PDS



<<<今後の活計画>>

- ・自治体数(地域)、人数、蓄積データ数等
- ・量の確保による利活用の可能性向上
- ●データ種別の拡大
- バイタルセンサーからのデータ測定・蓄積
- ・接続機器の拡大(ロボホン、トイレセンサー等) ・他分野からの取込(購買データ、人流データ等)
- ●利活用面への考慮
 - ・レセデータの本人開示(返却)継続検討
- ・信託の拡大と利活用
- HMネットとの連携
- ・ポイント有効活用
- (自治体とのポイント連携、インセンティブ、マネタイズ)

【コメンテーターからの質問など】

・ 病種は絞らない仕組みですか?

一自治体さんに対しては、介入して医療費が下がるである う疾病に限定している。

・トークンエコノミー浸透策の構想はありますか?

ーコンソーシアム内に実績とノウハウをもつ企業があるた め、実装する仕組みについては構築されている状態である。 今後は、自治体の制度との連携をどのように進めていくかが 課題となる。

・最終的には個人がデータ管理できる仕組みにすることが最 適であると感じますが、どうお考えですか?

一今回は時間的制約もあり、自治体の情報をエンジンにし ているが、今後はブロックチェーンを活用して個人がデータ を管理するシステムを目指している。コンソーシアム内のメ ンバーが国のイベントなども活用して商談を進めている。

- ・具体的に県内の市町で動いているところはありますか? ー県内の2~3市町とは交渉が進んでいる状態。 (交渉中につき、市町名公表は控えさせていただきます。)
- ・アプリの認知拡大についてはどうお考えですか?
- 一民間事業であれば広告でインセンティブを使ってダウン ロードしてもらえるが、本プロジェクトのような座組の場合 個人向けのインセンティブが難しい。その意味でも広報と利 用促進は課題であると考えている。

<コンソーシアム発表⑤>



目指すのは、**DX**を見据 えた事業共創が行われ る「データ仲介所」

本プロジェクトでは異なる企業間で取得したデータを連携せさ、より良いサービスを生み出すための基盤を構築することが目的となる。実証実験の1年目は各企業の持つデータをどの程度の対価や仕組みがあればオープンにできるか、ということを検討。2年目に入りそれらのデータ基盤の構築に入っている。

現在はデータ提供の前提となる 規約の策定に取り組んでいる会 で、経産省などの規約を参考に、11 のデータ利用をとってが、のデータ利用を実生がある。 がら所で、利用を実生がで、がらりで、11 のでは生生がでは、11 のではなが、がいかがでは、11 のではながが、関がが、関連結 はいかが、関がが、関がが、関節ではながが、関ががののがである。 はながが、関がが、関節では、15 はながが、関がが、15 はながが、関節では、15 はながが、関がが、15 はながが、関節では、15 はながが、関節では、15 はながが、15 はながが、16 はながが、16 はながが、17 はなが、17 はながが、17 はなが、17 は

今後は集まったデータを外部から分析できるAPI開発などの取り組みを進める。様々なプロジェクトとの連携のための規約の準備などが一層重要になってくる。



<<<今後の計画>>>

データ連携による分析機能検証

※コンソーシアム内データを用いた分析機能の実用化検証 ※外部BI/AIシステム(分析環境)ともAPI等で連携し、その実用性機能について検証する

<<<今後検討中の計画>>>

他コンソーシアムとのデータ連携の機能検証

※ひろしまサンドボックスの他コンソーシアムで個々に蓄積されている データの連携についても、連携機能評価検証を検討

【コメンテーターからの質問など】

・データの信ぴょう性はどう担保しますか?

ー情報の信ぴょう性はデータ提供者に任せていて、信じるかどうかは利用者の判断に任せる予定。あえてライトに利用できる「仲介所」というイメージで進めている。

・個人情報に関する対策はありますか?

ー統計データ、匿名加工データに限定しているため、個人 情報は扱わない方針である。

- ・コンソメンバーが大企業であることのデメリットとも言えるフットワークの課題はうまく解消して進めて欲しい。
- 一取り扱いに注意が必要なデータが多く、ハードルは高いが、実証実験を進めながら様々な気づきがあることは成果だと考えている。
- ・データ提供側に対するインセンティブはありますか?

ーDXという視点でお互いのデータ交換、事業共創を目指した取組を本基盤上で行っていかないと、データ提供が進まないような感触がある。

・課金モデルについての構想はありますか?

一例えば、大型商業施設のディベロッパーが各テナントの 混雑状況を把握する場合、データ提供者(センサー設置)が テナントになり、データ利用料はディベロッパーが支払うよ うな流れを想定している。

・行政組織が連携する構想はありますか?

一行政のオープンデータとの連携方法も検討しているため、それらのデータの一つとして行政機関からも利用して欲しいと考えている。

<コンソーシアム発表⑥>



低コスト**IoT**ソリューションで現場改革!

ものづくりの最前線である中小 企業の製造業におけるIoTを活用 したソリューションが本コンソー シアムのテーマだ。

取組は大きく4つに分類される。1つ目は、情報連携ツールを使い、工具や測定具の使用状況を見える化するというものである。これによって製造現場で起こりがちな共有物品を「探す」時間を削減することができる。

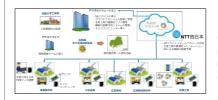
2つ目は製造機械の稼働状況の 見える化だ。照度センサとパトラ イトを組み合わせたIoTツールで、 機械の稼働状況を見える化した。 今後は集計情報もリアルタイムで 表示できるようなシステムを開発 中だ。

3つ目は機器に取り付けたセンサとAIで故障を予測するシステム。これは耐久テストを実際に行う時間を削減し、これまでは分析できなかった手書き集計のテストデータから現場を解放する。

そして4つ目は勘と経験で生産 工程を計画している現場に最適化 されたアルゴリズムから誰でも簡 単に生産工程を計画できるシステ ムの開発だ。

こうした安価で取り組みやすい IoTツールの導入を進め、現場の 改善を目指す。

つながる中小製造業でスマートものづくり



【取組内容】

①連携ツールで社内情報を見える化 ②IoTデバイスで機器の稼働状況を見える化 ③AIによる故障予知 ④生産工程の最適化

<<<今年度の実施事項>>>







<<<今後の予定>>>

連携ツールで社内情報を見える化

- ●適用する物品の範囲を広げる
- ●コンソーシアム企業同士で工具/測定具の貸し借りを実現する

IoTデバイスで機器の稼働状況を見える化

- ●不稼動原因を分析する
- ●加工音や加工液をモニタリングする

AIによる故障予測

- ●実験機に取り付けてデータを収集する
- ●MT法と機械学習による耐久性予測システムを構築する

生産工程の最適化

- ●最適化アルゴリズムの改良をおこなう
- ●コンソーシアムメンバーに導入し、実証実験をおこなう

【コメンテーターからの質問など】

・生産稼働状況の共有化も効率化につながると感じますが、 そういった情報の共有は行われますか?

一見せたくない情報も存在するのが現実なので、設定による情報提供の可否が変更できるような仕組みを目指したい。

・バリューチェーンを意識することが大事だと考えますが、 その部分に対するメンバー間の意識はありますか?

一現時点生産工程に軸足を置いているので、発注や経理的な視点に比べ重なりが薄い。また、生産状況をオープンにすることで既存の取引に支障が出るケースも想定されるため、徐々に意識を変えていきたい。

・ひろしまサンドボックスのきっかけになった大事なテーマですが、個社にカスタムするとスピード感が落ちませんか?

一現在あまりカスタムはしておらず、広げていく視点を重視している。しかし、時間がかかっている部分もあるので、 迅速に実証をすすめていきたい。

・実証のROIをどういう視点で説明する想定でしょうか?

一安価で取り組みやすいということをコンセプトにしている。スピード感をもって導入してもらえることを価値として loTに置いてけぼり感を感じさせないことがテーマ。また、どう横展開してマネタイズするか?という部分までは検討が及んでいないのが現状であるので、ここから3年目に向けて検討を進めていきたい。

コンソーシアム構成:デジタルソリューション(株)・谷崎隆士(近畿大学)・(株)津田製作所・(株)小松金属 (有)広陵発條製作所・近藤工業(株)・(株)広島精機・(株)アプストウェブ

<コンソーシアム発表(7)>



「みんなが笑顔になれる保育現場」=広島モデルの確立を目指す。

保育士にとって心理的・身体的 負担の大きい命の見守り業務の IoT化を進めたることで、保育士の 業務量を削減し、保育現場へ復職 しやすい環境をつくることが本プ ロジェクトの発端である。

具体的には今年度お昼寝(午睡)をする際にうつ伏せになっている子どもを通知するIoT機器

「ルクミー午睡チェック」を開発 し、保育園で実証実験を行なっ た。その結果、現場での作業量の 軽減、心理的な負担感の軽減と いった効果を得ることができた。

また、体温を非接触で測ることができる「ルクミー体温計」を試験導入。通常1人当たり1分かかる体温チェックを3秒で実施できるようになった。さらに、保育士が手書きで記入しなければならない帳票類(睡眠時間や体温など)をデジタル化・一元管理することを進めた。

最終年度にはそれらのプロダクトと帳票類をつなげ一層の負担減を図る。安心・安全で効率的な保育現場を実現し、広島から日本・世界にこのシステムを展開していくことが狙いだ。



【コメンテーターからの質問など】

・午睡チェックや非接触型の体温計の負担削減効果は数値でいうとどの程度でしょうか?

一作業量もさることながら、例えば、これまではチェック しにいく必要のあったうつ伏せが、音で通知されるという安 心感が保育士の心理的な負担を下げる効果につながった。

・現場への導入部分にどの程度の負担がかかるかを残りの実 証で検証してみてはどうでしょうか?

一現在、現場を回ってニーズを丁寧にヒアリングしており、押し付けにならないように留意しながら進めていおり、 一足飛びには導入できないと考えている。

・ビジネスモデルとしてのコスト面の妥当性についてはどう お考えでしょうか?

一保育現場でのコストでいうと、離職率が下がるということは採用コストの圧縮につながりメリット訴求はできる。またプロダクトの価格についてはランニングコストも維持しやすい価格設定にし、補助金の対象ともなることも踏まえて導入メリットを感じていただくことができると考えている。



<コンソーシアム発表®>



AI/IoTと衛星データで せとうちに散歩道を。

課題の軸足は、島しょ部における人口減による定期航路の減少と瀬戸内海の事故の多さを解決したいというものだ。もう一方で、現在、瀬戸内海の観光資源としての価値は見直されており、付加価値の高いアクティビティをAIを使って発掘することも同時に狙う。

具体的な取組としては、海洋交通手段となる船舶のライドシェアのプラットフォーム開発と事故の多い瀬戸内海での安全航行を実現するアプリの開発。

ただ、現在実証実験にあたっては、船の調達が大きなハードルとなり実験が進まない状態が進んでいたが、見通しがついたためこれから実証実験が本格始動する。また、山口大学との連携により衛星データを使ったリモートセンシングにより浅水帯の水深マッピングなども開発予定だ。

広島が誇る瀬戸内海が我々の生活の一部として利用されやすい場所となること、そして、世界的にも付加価値の高い観光資源として活用されることを目指している。



【コメンテーターからの質問など】

- ・ビジネスモデルとしてそれぞれハードルが高いように感じますが、全て推進される構想でしょうか?
 - 一全て推進する予定である。
- ・元々は安全航海が主眼であると理解していたが、ライド シェアに振り切ったということでしょうか?

ーその通りです。scheme vergeのサービスをOEMで利用するというよりは、その部分のプラットフォームを担当してもらい、コンソーシアムとしては、サービス全体の調整の方に回ろうという発想に切り替えたイメージである。

- ・今後、船舶の供給が足りないという状況に陥りそうですが、その対策は想定されていますか?
- 一portlが管理する関東の船を瀬戸内に移送することを考えている。広島でも船舶のシェアリングをしている企業と交渉は随時行っていくが、オーナーの理解促進が必要。
- ・ハードルの高いプロジェクトで、アウトとインの変化に対応しなければいけないプロジェクトです。まさにひろしまサンドボックスらしい取組だと言えますので、他のコンソーシアムにも参考にしていただきたいです。

<コンソーシアム発表9>



都市部から郊外定住部まで、通信型ITSで交通弱者にやさしいスマートシティ広島へ

通信型ITSを活用し、中期的には都市部での交通事故削減を目指し、その後郊外まで含めた広域でのITSスマートシティを目指す構想が本プロジェクトだ。

基本的には車両に搭載する通信型ITS車載機で、路上の信号機などに取り付けられた車両感知器や歩行者感知器センシングした情報を受け取り、支援モニタで運転者が情報を確認することができる仕組みになっている。実証実験では市内中心部4箇所に機器を実際に設置をし、来年度から実験を行うことになる。

具体的なシチュエーションとしては、交差点での信号機の変化までの残時間を情報として提供したり、線路上の歩行者の残存状況を路面電車に通知したり、路面電車の後方の車両や歩行者情報などを通知したりと、実際の事故が起こりやすい場面を回避するための情報が支援画面に通知される。

来年度の実証に向け機器の開発 は概ね完了しており、実際にITS機 器を搭載した車両が走る姿を街中 で見られる日が迫っている。

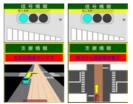


【コメンテーターからの質問など】

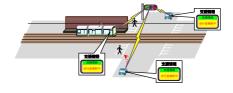
・KPIとしての事故数の軽減計画はありますか?

ー事故のデータは検証しており、実証実験の場所に選んだ 交差点も実際に事故の多い場所である。KPIに関しては危な かった事例の数などで検証していく。

- 予算感はどの程度で考えていらっしゃいますか?
- 一設置数が増えればコストは下がるが、路面電車 1 台につき100万円以上はかかる。
- ・海外展開も視野に入れた展開であると理解していますが、 今後のデータ連携も見据えた場合に、どういったデータ収集 が実現する想定でしょうか?
- ー車両のデータや実際に支援したデータなどは取得できる。そのようなデータから事故の多い状況の分析なども可能かと考えているが、次年度実際に検証した結果詳細の報告ができると考えている。



車両側支援画面イメージ



通信型ITS支援場面例



広島県民のスマートライフ実現に向けたデータ連携基盤実装の推進について

全てのコンソーシアムの中間報告終了後に、広島県 イノベーション推進チーム中井プロデューサーから データ連携基盤実装の推進についての説明があった。

ひろしまサンドボックスの実証実験で取得された データはひろしまサンドボックスデータ連携基盤で連

携され(各コンソーシアム間の連携は任意)、広島県によるデジタルトランスフォーメーションの柱となる。また、専門部会が組織され、データ連携基盤専門部会では、広島県とプラットフォーマーが参加し、データマネジメントに係る運用ガイドラインやデータ連携基盤システムを実現する技術検討を行い、分野を超えたデータ連携を実現するための利用規約などを策定している。もうひとつの専門部会であるライフログデータ専門部会では、データ連携基盤をベースとした広島県民のスマートライフの実現に向けたユースケースの検討が行われており、2つの部会は両者フィードバックを重ねながら検討を進めている。来年度はこのデータ連携基盤の利用が開始され、コンソーシアム間でのユースケースの検討および、コンソーシアム以外との新規オープンイノベーションも検討されている。そういったことも見据え、よりデータ連携基盤が充実するために、各コンソーシアムに対してデータ連携の強化と、コンソーシアム間でのユースケースの検討依頼がなされた。

次のステップにつながるネットーワーキング

プログラムの最後には、発表時に聴講者が記載した付箋が貼られた各コンソーシアムの中間発表の状況がまとめられたパネルが会場に配置された。質問だけでなく、激励や連携を呼びかけるメッセージなど多様な意見が貼られており、発表者はそういった意見を元に考えを深めたり、新たな協働先が見つかるきっかけになるなど、参加者にとって有意義な時間となった。









